

学部横断型プロジェクトベースドラニングの 導入に関する研究

Study on the Introduction of Cross Faculty Project Based Learning Program

那 須 一 貴¹, 笠 岡 誠 一²
Kazutaka NASU³ Seiichi KASAOKA⁴

Abstract

Project based learning program is notable education program for the university and college students because of its high educational efficiency for developing competence which is necessary for business person. Some of the project based learning program are conducted with outside organizations such as company and research institute. Participants can study the necessity of changing their mind and behavior by working with outside people who has different background and experience. We believe the cross faculty project based learning program can achieve same educational results. In this study, as our first step, we conducted pilot program for cross faculty project based learning program under the collaboration between faculty of international studies and faculty of health and nutrition. We conducted questionnaire survey to the participating students of both faculties to understand the educational efficiency of the project based learning program. We found out the fundamental competencies for working persons⁵ that is defined by Ministry of Economy, Trade and Industry was developed through the project period.

1. はじめに

プロジェクトベースドラニングとは、参加者がプロジェクトに主体的に参加することで従来の座学や講義とは異なる学び・成長を実現するものである。特に大学教育におけるプロジェクトベースドラニングの意義とは、大学での学びをより実践的に活用することで新たな学びの課題を発見できるといったことは勿論のこと、いわゆる社会人基礎力と呼ばれる「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」

といった社会人として行動していく上で求められる力を養う上で高い効果が期待できるという点である。

すでに数多くの大学で学生によるプロジェクト参加型プログラムが導入され、高い教育効果を実現している。他大学で実施されているプロジェクトベースドラニングとしては、外部機関からの研究委託に基づくプログラム、企業との共同プロジェクト的なプログラム、大学の研究教育プログラムの一部として実施されるもの

¹ 文教大学国際学部 准教授

² 文教大学健康栄養学部 教授

³ Associate Professor, Faculty of International Studies, Bunkyo University

⁴ Professor, Faculty of Health and Nutrition, Bunkyo University

⁵ In February, 2006, the Ministry of Economy, Trade and Industry defined the basic abilities required in working together with various people in the workplace and in the local communities as "Fundamental Competencies for Working Persons" which consist of the three competencies (12 competency factors) at a committee comprising of intellectuals in the businesses and universities.

など様々な形態がある。これら外部機関との共同実施によるプロジェクトベースドラニングの特徴として、外部機関と共にプロジェクトを実施することにより固定的な考え方を必要とする必要性や異なる組織文化や行動基準を持つメンバーとのコミュニケーションの取り方など、様々な学びの機会を得ることができ、参加者にとっても、外部機関とプロジェクトを実施することで良い緊張感を感じることができ、それが高い教育的効果につながるのではないかと考えられる。

このような外部機関とのプロジェクトベースドラニングと同じような効果が得られる方法として、学部横断型のプロジェクトベースドラニングが考えられる。異なる学部との共同作業を通じて他学部の専門的知識を学んだり、外部組織とのコミュニケーション方法を身につけたりすることが可能である。

文教大学湘南キャンパスには2014年時点で4つの学部が存在する。これらの学部が横断的に協力してプロジェクトベースドラニングプログラムを実施することは、大学独自のリソースの活用にもつながり文教大学独特の教育プログラムとすることが可能である。また単一学部では取り組むことができない課題に挑戦することもできるため、参加者にとっても多くの学びの機会をえることができ、高い教育効果が期待できる。

本研究では、2013年度に実施された文教大学国際学部那須一貴ゼミナールと健康栄養学部笠岡誠一ゼミナールとともに取り組んだ「志賀高原の観光活性化を目的とした自立型観光案内所設立のための実証実験プロジェクト」の事例を用いて、文教大学湘南キャンパスにおける学部横断型プロジェクトベースドラニングの導入について検討するものである。

2. 本研究の目的

本研究の目的は、文教大学湘南キャンパスにおける学部横断型プロジェクトベースドラニ

ングの導入に向けて、学部横断型プロジェクトベースドラニングの教育効果の検証と実施段階における課題とその解決方法を検討することにある。

この目的を達成するために、志賀高原観光協会と志賀高原リゾート開発株式会社の協力のもと、2013年度に実施した「志賀高原の観光活性化を目的とした自立型観光案内所設立のための実証実験プロジェクト」（以下、志賀高原カフェプロジェクト）を文教大学国際学部那須一貴ゼミナールと健康栄養学部笠岡誠一ゼミナールの学部横断型プロジェクトベースドラニングとして実施した。志賀高原カフェプロジェクトの実施にあたっては、文教大学の2013年度学長調整金予算を活用した。

本プロジェクトの目的を達成するために、本研究では以下の方法を用いた。

- (1) 本プロジェクトの実施に先立ち、他大学のプロジェクトベースドラニング事例について参考文献調査をおこなった。
- (2) 参加学生に対して、事前、中間、最終の3段階でアンケート調査を行い、参加学生に対する教育効果とプロジェクトへの取り組み意欲や問題意識などに関する確認をおこなった。
- (3) プロジェクト担当教員はプロジェクトに係る会議への出席、現地調査、カフェで提供する商品の試作会、現地調査、プロジェクト実施期間中の現地作業、最終報告会へ出席し、学生の活動の様子を細かく観察した。
- (4) 志賀高原観光協会、志賀高原リゾート開発株式会社の関係者に対して本プロジェクトの成果についてヒアリングをおこなった。

上記方法を通じて、学部横断型プロジェクトベースドラニングの教育効果の検証とその課題を明らかにすることとする。

3. 学部横断型プロジェクトベースドラニング (志賀高原カフェプロジェクト)

3-1 志賀高原カフェプロジェクトの概要

志賀高原カフェプロジェクトとは、文教大学国際学部那須一貴ゼミナールが2010年より長野県志賀高原において取り組んでいるプロジェクトである。このプロジェクトは那須一貴ゼミナールに所属する大学3年生が中心となり実施されるもので、4月から7月末までの準備、8月のプロジェクト運営、11月の最終報告会での成果発表という約8か月間に及ぶ活動である。

志賀高原は長野県下高井郡山ノ内町にあり、上信越高原国立公園の中心部である。東は草津温泉、万座温泉と接し、また国道292号線を利用して南下すれば小布施方面へ行くこともできるなど、周辺の観光地とも隣接している。志賀高原中心部は一般財団法人和合会により所有・管理されており、素晴らしい自然の景観と温泉が楽しめる観光地となっている。

志賀高原は戦前から日本を代表的するスキーリゾート地として高い知名度を有している。特に1980年代のバブル経済期にはスキーブームが起こったこともあり、数多くのスキー客が志賀高原を訪れ地域経済の発展に寄与していた。また1998年に開催された長野オリンピック・パラリンピックでは、アルペンスキー競技の会場として多くの観光客が訪れた。

しかしこの頃を境に日本のスキーブームが徐々に翳りを見せ始め、冬季に志賀高原を訪れる観光客が減少しはじめた。そこで志賀高原では、夏場の涼しい気温と手つかずの自然を活用した夏の観光プロモーションに取り組むようになった。観光ガイドによるガイド付きのトレッキングなど、志賀高原関係者による自然という観光資源を観光客に楽しんでもらうという取り組みにより現在では夏季に100万人を超える観光客が志賀高原を訪れるようになり、冬季のスキー客数よりも夏季の観光客数の方が多くなりつつある。

文教大学国際学部那須一貴ゼミナールでは、2010年より夏の志賀高原の更なる観光活性化を実現するための様々な活動に取り組んでいる。2010年、2011年には、志賀高原内の宿泊施設におけるインターンシップを通じて、志賀高原の夏季の観光状況の理解と宿泊施設におけるサービス品質向上のための業務改善施策の検討をおこなった。

その過程において夏の志賀高原の更なる観光活性化の問題として、志賀高原を訪れる観光客に対して十分な観光情報の提供ができていないこと、特に志賀高原を初めて訪れた観光客に対して夏の志賀高原観光の魅力を十分に伝えることができていないことに着目した。この問題に対して、志賀高原観光のリピーターが知っている夏の志賀高原の楽しみ方を志賀高原の観光情報として他の観光客に伝えることにより解決できないかと考えた。夏の志賀高原の様々な場所で起こっている「今」を伝えることにより、観光客に対してその場所へ訪れるという行動を促し志賀高原内の回遊性を高めることができれば、志賀高原全体の活性化の第一歩につながることも可能である。

観光客が持っている情報を他の観光客に伝えるための方法を実証するために、2012年に志賀高原内の発哺温泉にあるホテル東館の協力により、ホテルのロビー内に「観光情報提供型カフェ」を設置した。この情報提供型カフェの特徴は、観光客から志賀高原で撮影した写真データを提供していただき、それを店内でプリントし撮影者のコメントとともにカフェ店内に設置された大型のボードに掲載してタイムリーな観光情報を提供する、ということであった。8月初旬から中旬までの10日間の営業期間中に100枚以上の写真とコメントを観光客からいただくことができ、情報提供型カフェにご来店いただいた方々から好評をいただいた。

2012年の観光情報提供型カフェではコンセプト立案、資機材と原材料調達、志賀高原関係者への協力依頼、現地での運営、最終報告書の

執筆とプレゼンテーションの実施など、一連の活動を全て学生が中心となって実施した。その過程において参加学生は様々な経験を通じた学びが得られ、大きく成長することができた。特に、自ら企画・運営に従事することで大学の講義では学ぶことができない実践的な知識、ゼミ生同志で目的を設定してそれに取り組むことでチームワークやコミュニケーション力を身につけることができた。

2012年に実施した観光情報提供型カフェの成功を踏まえ、志賀高原観光協会より2013年の取り組みテーマとして「自立型観光情報提供型カフェの実証実験を通じた事業化のための検討」の委託を受けた。これは喫茶店の収益により観光案内所の運営費用をまかなうことができる自立型の観光案内所を設置するための具体的な方法について検討する、というものである。このテーマに取り組むに当たり、2012年に実施した観光情報提供型カフェにおいて観光客より地元産品を用いたスイーツやジュースに関して高いニーズがあったことを踏まえて、山ノ内町で採れる果物や野菜を原材料とするメニューを開発し提供することとした。

そこでこのメニュー開発において、国際学部と同じ湘南キャンパスにある健康栄養学部の笠岡誠一ゼミナールに協力を依頼し、国際学部と健康栄養学部による学部横断型のプロジェクトとして実施することとなった。

同時にこの事例を用いて、プロジェクト参加学生の学び、気づき、成長を実施前、実施中、終了後の3段階でアンケートやインタビューを通して把握することで、プロジェクトベースドラーニングの効果を測定し今後のプロジェクト運営に活用するとともに、文教大学湘南キャンパスの特徴を活かした学部横断型プロジェクトベースドラーニングプログラムの導入のための方法と解決すべき課題について検討することとした。

3-2 プロジェクト実施状況

2013年に実施された志賀高原カフェプロジェクトの実施状況であるが、大まかなスケジュールは以下の通りである。

2013年1月：事前研修

2013年4月～6月：プロジェクトコンセプトの検討

2013年5月～7月：メニュー検討、試作の実施

2013年6月：現地調査（2回実施）

2013年6月～7月：観光情報提供の仕組み検討

2013年7月：資機材の調達

2013年8月：カフェの運営

2013年9月～10月：最終報告書の執筆

2013年11月11日：志賀高原での最終報告会

以下に本プロジェクトの実施状況について時系列に従って述べる。

(1) プロジェクトの事前研修

学生による志賀高原カフェプロジェクトの実施に先立ち、4月から国際学部那須一貴ゼミナールに所属することが決まった大学2年生に対して1日間の事前研修を実施した。事前研修の目的は、その年のプロジェクトのテーマやコンセプトを決定するために那須一貴ゼミナールが前年度までに実施した志賀高原でのプロジェクト内容を理解しておくこと、プロジェクトで活用する論理的思考の技術と基礎知識を身につけることである。

特に論理的思考の技術は座学では学びにくい分野である。プロジェクト内で参加学生が意識的に論理的思考を活用することが重要である。具体的には、何故そうなるのかを繰り返し考えること、物事の全体を把握し今起こっていることを考えること、ロジックツリーやKJ法など様々な論理的思考のツールを会議・打ち合わせなどで積極的に使ってみることを学生に対して指導した。

論理的思考の技術を身につけることは、メンバー間のスムーズなコミュニケーションの実現にも効果を発揮する。スムーズなコミュニケーションを実現するためには、相手に対して自分の伝えたいことをキチンと伝えることが基本である。自分の伝えたいことをキチンと伝えるためには、自分自身がなぜそう考えたのかを正しく理解したうえで、それを論理的に整理しなければならない。また会議でメンバー全員が目的を共有化して建設的な議論をする際にも論理的思考の技術は有効である。

加えて5月には外部講師による1日間のコミュニケーション研修をおこなった。この研修では座学のみならずグループワークを通じて、コミュニケーションスキルとチームワークを身につけることを目的とするものである。

またプロジェクトの開始に当たり、参加学生がカフェプロジェクトの準備段階で実施すべき作業内容を洗い出し、プロジェクトメンバーの組織化をおこなった。その結果、プロジェクトマネジャー1名、サブリーダー1名、広報チーム、財務チーム、企画マーケティングチームという体制で実施することになった。参加学生は各々の興味に基づき、自分が主に従事したい作業を担当するチームに所属することとした。プロジェクトマネジャーとサブリーダーは参加学生からの立候補により決定した。

役割分担に続き、カフェプロジェクトの全体会議の日程を決定した。カフェプロジェクトの準備は通常の学期期間中に行われるため、参加学生が受講している講義やゼミナールの開講時間以外の空き時間を利用して進めなければならない。プロジェクトマネジャーが中心となって参加学生全員の時間割と担当教員のスケジュールを考慮し、火曜日の4時間目以降、金曜日の4時間目以降をプロジェクト会議日とした。この2日間以外にも各チームが担当する作業に応じて適宜ミーティングや作業時間を設定することとした。

(2) プロジェクトコンセプトの立案

プロジェクト実施の第一歩として、プロジェクトコンセプトの立案作業をおこなった。この作業は参加学生のうち国際学部那須一貴ゼミナールの大学3年生が中心となって実施した。

プロジェクトコンセプトの立案段階では、学生に対して以下の点を指導した。

- ① 本プロジェクトの目的は夏の志賀高原の観光活性化であることを念頭に置くこと
- ② プロジェクトコンセプトはプロジェクトメンバーが理解しやすいものとする
- ③ プロジェクトコンセプトは簡潔な文章で表現すること

志賀高原カフェプロジェクトはあくまでも夏の志賀高原の観光活性化が目的である。プロジェクト参加学生はこの目的を常に意識しなければならない。特にカフェの運営段階では、参加学生の意識が日々の売上目標と利益目標の達成に向かいがちである。売上目標と利益目標の達成も重要であるがそれはあくまでも二次的な目標であることをプロジェクトメンバー全員が正しく理解しておく必要がある。

またプロジェクトコンセプトは参加学生間でのプロジェクトに関する議論が暗礁に乗り上げた場合の抛り所となり、プロジェクトに係る行動の基盤となるものである。そのため、プロジェクトコンセプトは参加学生全員が理解しやすいものでなければならない。さらに参加学生間でプロジェクトコンセプトを共有するために、それを簡潔な文章で表現する必要がある。今回は特に学部横断型プロジェクトということもあり、プロジェクトコンセプトが共有されなければプロジェクトチーム間で検討の方向がずれてしまうことが想定されたため、プロジェクトコンセプトの立案は慎重に行うこととした。

プロジェクトコンセプトの立案作業では、志賀高原観光協会から委託された「自立型観光情報提供型カフェの実証実験を通じた事業化のための検討」というテーマについて、まず自立型観光情報提供型カフェが成立するための要件を参加学生同士で検討することとした。次に自立

型観光情報提供型カフェとは何かを具体的に定義し、それに基づき自立型観光情報提供型カフェの機能を洗い出した。これらの検討結果に基づき、プロジェクトコンセプトを立案した。

この段階では事前研修で学んだ論理的思考の技術を活用した。自立型観光情報提供型カフェが成立するための要件をロジックツリーで整理し、その目的を達成するために自立型観光情報提供型カフェが持つべき機能を検討した。プロジェクト開始当初はプロジェクトコンセプトの立案作業として1か月程度を想定していた。しかし、カフェプロジェクトの準備を進めていくうちに参加学生より様々なアイデアが出され、その都度プロジェクトコンセプトに関する議論を行うこととなり、結果的にプロジェクトコンセプトが確立したのは6月末であった。

2013年の志賀高原カフェプロジェクトのコンセプトは、

- ① 志賀高原の観光客やリピーターが持っている志賀高原の「今」の観光情報を、志賀高原に訪れた観光客に対して解りやすく伝えること
 - ② 志賀高原周辺地域の食材を用いたスイーツを提供し、観光消費の増加を図ること
- とし、店舗名は「Café 森の案内所」とすることとした。

(3) 現地調査

参加学生の殆どが志賀高原への訪問経験が無いことから、プロジェクト期間の早い段階で現地調査を実施した。現地調査は国際学部と健康栄養学部の参加学生が同行して行われた。現地調査では、国際学部メンバーは観光情報の収集やハイキングコースの下見を行い、健康栄養学部メンバーはスイーツ開発に用いる地元食材の調査をおこなった。以下に国際学部、健康栄養学部で実施した現地調査について述べる。

1) 国際学部メンバーによる現地調査

国際学部メンバーによる現地調査の目的は、

観光情報の収集、ハイキングコースの下見、カフェの店舗予定地の確認、志賀高原関係者との打ち合わせである。現地調査のスケジュールリング、訪問先の決定、関係者へのアポイントの取得などは全て参加学生自らがを行い、2泊3日の現地調査を2回実施した。

現地調査期間中は毎晩ミーティングを行い、その日の調査結果や打ち合わせ内容について担当者が他のメンバーに対して報告し情報の共有化に努めた。現地調査の内容は以下の通りである。

- ① 志賀高原観光協会をはじめとする志賀高原関係者との打ち合わせ
- ② 参加学生が考案したハイキングコースの下見
- ③ ガイドツアーハイキングへの参加
- ④ 店舗設置予定場所の確認
- ⑤ 店舗内で放映する志賀高原のプロモーションビデオの作成

上記内容を短期間で効率よくこなすために、現地調査期間中は参加学生をグループ分けし、各々の担当業務を明確化した。

2) 健康栄養学部メンバーによる現地調査

本プロジェクトにおける健康栄養学部笠岡ゼミナールの役割は、志賀高原の特産品を使ったスイーツを開発することであった。そこで、スイーツに使用できる農産物を探すため現地調査を行った。現地調査には健康栄養学部笠岡ゼミナールの3年生2名が参加した。課外活動では他学部の学生との交流はあるものの、授業の一環として他学部の学生と共に2泊3日の遠出は初めてであり表情から緊張しているのが窺えた。まさに「適度な緊張感を持つ」経験をしたと思われる。現地調査2日目、笠岡ゼミナール生2名と那須ゼミナール生1名を車に載せ横手山に向かった。志賀高原の観光地の一つである。ドライブインで提供されている食事や土産を見て回り、志賀高原ならではの特産品を探した。志賀高原でしか栽培・収穫されていない食品が

見つければすぐにでも特徴あるスイーツが開発できるが、そのような食品はまず存在しない。カフェを運営する夏の時期に最盛期な食品や他県他地域に比べ収穫量の多い食品を想定しつつ現地を見てまわった。食事処の一角でソフトクリームを販売していた。休憩を兼ね何種類かを学生と食べた。その中に熊笹ソフトクリームがあった。見た目は抹茶ソフトクリームだが、食べた直後のスッキリとした冷涼感に熊笹独特の味を感じた。志賀高原の至るところで生い茂っている熊笹は、冬眠から覚めた熊が最初に口にする食べ物とも考えられている。食物繊維が豊富で冬眠明けの熊の大腸内環境を改善しているとの説もある。北海道ではダイエット素材としてすでに認知されているらしい。熊笹スイーツが候補の一つとなった。その後、道の駅の農産物直売所で出荷状況などを聞いた。カフェ運営期間中に最盛期を迎える桃を勧められた。幸運にも那須ゼミナール生の関係者に桃を栽培している方がおり、市場価格より安価に提供いただけるため桃も候補とした。その他、ブルーベリー、きのこ、小布施牛乳、ほんわかヨーグルトなどをスイーツの原材料の候補とした。

(4) 店舗開設・運営のための準備作業

2回の現地調査と2012年に実施したプロジェクト内容などを踏まえ、参加学生は店舗開設と運営のための準備を進めた。準備作業は4月中旬から7月末までの3か月半で行われた。準備段階での主な作業内容と担当チームは以下の通りである。

- ① プロジェクトマネジャー：全体の統括、外部との交渉・連絡の窓口
- ② サブリーダー：プロジェクトマネジャーのサポート業務
- ③ 広報チーム：プロジェクトに関する広報活動。様々なメディアやSNSを活用した広報活動、プレスリリースの作成、ポスターやチラシ等の作成業務
- ④ 財務チーム：プロジェクトの費用・売上げ

計画の立案、コスト管理、帳簿管理、現金の出納業務

- ⑤ 企画マーケティングチーム：販売商品の企画、市場調査の実施、店舗デザイン・店舗運営方法の企画立案、食材を提供していただく地元農家との打合せ業務

準備段階では、プロジェクトコンセプトの立案と並行して健康栄養学部とメニュー開発に取り組んだ。食は観光において重要な要素である。その場所でしか食べることができないものは観光客の興味を引き、その場所へ訪れる強い動機となる。最近ではB級グルメのイベントが各地で開催され、多くの人々がイベント会場へ足を運んでいる。

B級グルメが観光振興に及ぼす影響は、イベントによる集客のみならず、B級グルメイベントで有名になった商品を食べるためにイベント後にその地域に訪れる人が増えるところまで及んでいる。つまり、イベント後に行われるPRが観光客誘致に高い効果を発揮している。2013年の志賀高原カフェプロジェクトでは、プロジェクト期間中に販売した地域食材を用いたジュースやスイーツをプロジェクト期間終了後の観光客誘致につなげることを目的にメニュー開発に取り組むこととした。国際学部の参加学生は、これを実現するためには食材が簡単に地元で手に入ること、作り方が簡単であることなどの条件を健康栄養学部の参加学生に伝えてスイーツ開発に取り組んでもらった。

店舗開設・運営のための準備作業はグループワーク形式で行われた。各チームがメンバー同士のスケジュールを調整し、必要な作業をこなしていった。火曜日と金曜日に開催される全体会議ではプロジェクトマネジャーとサブリーダーが司会を務め、各チームの作業の進捗状況の報告、工程管理、解決すべき課題に関する議論、予算配分に関する議論など、プロジェクト全体に係る事項について議論を重ねた。

全体会議と各チームの作業内容は議事録に纏められ、会議の数日後にはプロジェクトメン

バーへ通達することとして情報の共有化を図った。議事録の作成は主にサブリーダーが実施していたがその時の状況に応じて他のメンバーが交代することもあった。必要に応じてプロジェクトマネジャー、サブリーダー、各チームのリーダーがリーダー会議を行い情報の共有化と調整を実施していた。

会議の資料やデータ類は、無料で利用できる情報保存サイト（dropbox など）に共有フォルダーを設置して参加学生間で共有した。

参加学生は参加学生内部のみならず、外部関係者とも積極的にコンタクトしてプロジェクトを推進した。広報チームはテレビ、新聞社、雑誌社などのマスメディアに対してプレスリリースを送付したり取材の対応窓口としてプロジェクトに係る情報発信をおこなったりした。プロジェクトマネジャーとサブリーダー、各チームのリーダーは志賀高原観光協会、財団法人和合会といった志賀高原関係者との打合せを主に担当した。

また今回のプロジェクトでは、志賀高原に訪れた観光客による情報を共有化するための仕組みを考案するという大きなテーマがあった。これについては、企画マーケティングチームが中心となり参加学生全員で議論を重ねた。この仕組みを考案するために、参加学生はマーケティングの基礎知識はもとより、顧客満足度を高めるためのサービスに関する理論、ウェブサイトを始めとする IT 技術、リードユーザーによる技術革新に関する理論などについて文献調査をおこなった。その結果、「キーワードによる情報検索ができる写真ボード」を考案した。これは観光客が撮影した写真をカフェ内で印刷し、それを撮影した人がコメントを書いた台詞に貼り、カフェ店内に設置された情報ボードに掲載するというものである。

情報ボードには、「家族の絆が深まる」、「トトロに会えるかも」といった観光客のニーズや興味を引くキーワードが書かれており、写真の撮影者がそれらキーワードの中で最も適当と思

われるところに掲載する。これを積み重ねていくことで、今の志賀高原で何を見ることができ何を楽しむことができるのかが情報ボードに集まってくる。そしてカフェを訪れたお客様がその情報ボードを見ることにより、それまで知らなかった志賀高原の魅力に興味を持ち実際にそこへ行くようになることで志賀高原内の観光客の回遊性を高めることができる。

この一連のアイデアを考える段階では、事前研修で学んだ論理的思考を活用してロジックツリーを作るなど議論のプロセスを可視化することで皆が積極的にアイデアを出し合った。またメンバー同士で「なぜ」という質問を繰り返すことで問題の本質に迫る努力を繰り返し、議論を深めていった。

また、現地でのオペレーションをスムーズに行うために、想定されるすべての業務について業務マニュアルを作成した。プロジェクトメンバー全員で議論を重ねて可能な限り業務内容を標準化し、参加学生全員が全ての業務をこなすことができるようにした。

(5) スイーツの試作

健康栄養学部の学生が中心となりカフェで提供するスイーツを開発した。

①試作 I 志賀高原のイメージをもとに

現地調査を行う以前に「志賀高原」のイメージをもとにスイーツを考案した。きのこのキッシュ、山の果実タルト、きのこのパウンドケーキ、きのこの食べるスープ、ミニパフェ、パンケーキ、生野菜・果実のミックスジュース、イチゴのスティックケーキ、桃のバラゼリーなどのレシピを考え試作を幾度か繰り返した。ある程度納得のいくスイーツが出来上がった後に国際学部の学生と共に試食会を開いた。多面的な意見を聞くことができスイーツ開発には有効な会であった。そこでさらに改良を加え、桃のバラゼリー、ミルクプリン、ブルーベリースムージー、フルーツタルトをカフェでの提供スイーツの候補とした。

②試作Ⅱ 現地調査を経て

スイーツのコンセプトは「志賀高原ならではの」「カフェ終了後も志賀高原で提供され続ける」であるため、現地にて特産品の調査を行った。その結果、熊笹、ブルーベリー、きのこ、小布施牛乳、ほんわかヨーグルトをスイーツ原材料の候補とした。原価計算も行い幾度も試作を繰り返した。

③試作Ⅲ パティシエによる技術指導

カフェで提供するためにはより完成度の高いスイーツを提供したいとの考えから、横浜市緑区霧が丘にある「Cake Shop そら」のシェフパティシエである桜井浩和氏に文教大学にお越しいただきスイーツ開発の技術を指導いただいた。素人では思いつかないような盛り付けや食材の組合せなど多くの貴重なお話をうかがえた。その経験をもとに改良を重ね最終的に、熊笹プリン、志賀高原特産のほんわかやヨーグルトを使ったチーズケーキ、桃のジュースをメニューとして決定した。

(6) カフェの運営

志賀高原での現地運営期間は2013年8月6日から8月26日までの3週間に及んだ。8月6日、7日が準備期間、8月8日から8月25日までがカフェ運営期間、8月26日が撤収期間であった。プロジェクトサイトは蓮池にあるゲートウェイステーション1階と発哺温泉にあるホテル東館のロビーの2か所である。各々の店舗にキッチンスタッフ3名、ホールスタッフ3名の体制をとり、国際学部の参加学生が中心となり、全員が交替で両方のプロジェクトサイトでキッチン業務とホール業務をこなした。キッチンスタッフには健康栄養学部の参加学生も参加した。

以下に国際学部及び健康栄養学部の参加学生がカフェの運営期間中に実施した内容について述べる

① 国際学部スタッフのカフェ運営期間中の主な実施内容

国際学部スタッフが中心となってカフェ運営をおこなった。準備期間中はカフェの設営、必要な資機材と提供する商品の原材料の調達、情報提供ボードの組み立てと設置、スイーツの仕込み作業などをおこなった。

カフェオープン後は、ホールではお客様への声掛け、志賀高原の観光情報の提供、カフェの接客業務、キッチンでは提供する商品作りに従事した。スタッフはシフトを組み、全員が様々な業務に従事することとした。その理由は、全員がホールとキッチン、蓮池ゲートウェイステーション店とホテル東館店での業務を経験することで、お互いの立場を理解しあうこと、ホールとキッチンという異なる視点から店舗運営を見直すことで日々の業務改善のアイデアを検討することができるということである。

また毎朝カフェのオープン前には参加学生が中心となって朝礼を行い、その日の目標と前日のオペレーションを踏まえた問題点とその解決策を確認しあい、夜にはその日の収支と原材料の在庫状況の確認やオペレーションを通じて明らかとなった問題点の洗い出しとその解決策の検討を実施した。この過程では、準備期間中に策定した業務マニュアルの変更・修正も行い、現実を反映したオペレーションの仕組みの構築に取り組んだ。

さらにカフェ運営期間中に変化する客層とニーズに対応するために、参加学生がお客様との会話の中から得た情報を毎晩の会議で他のメンバーにフィードバックし、新たなサービスの検討をおこなった。

② 健康栄養学部スタッフのカフェ運営期間中の主な実施内容

健康栄養学部スタッフはスイーツの調理、調理方法のマニュアル化、食材の発注・検品・管理などを行った。

現地の事前調査の際に使用するキッチンのスペースや使用できる調理機材・調理器具などの確認を行っていたが、把握が不十分で戸惑うことが多かったようだ。また、調理実習を授業で

行っている健康栄養学部の学生とそうでない国際学部の学生では調理や食材の扱いに関する知識の違いがあったが、連日の会議等で意思疎通も図れるようになった。

また調理以外にも国際学部スタッフと同様に蓮池ゲートウェイステーション店とホテル東館店のホールに出て接客も行った。

(7) 最終報告書の執筆と最終報告会

8月8日から25日までの18日間のカフェ運営の結果、約1300人のお客様にカフェをご利用いただき、100件を超える志賀高原の観光情報を入手することができた。これらの成果を踏まえて9月、10月の2か月間で志賀高原観光協会、志賀高原リゾート開発株式会社、財団法人和合会に提出するための最終報告書の執筆作業をおこなった。

まず参加学生全員で最終報告書の目次を決め、各章の具体的な内容について検討をおこない、その結果を踏まえて各章の担当者を決定した。カフェ運営期間中に実施した志賀高原での観光に関するアンケート調査の集計・分析とカフェの収支に基づく自立型観光案内所の成立要件についても参加学生全員で議論を重ね、その結果を最終報告書に反映させることとした。

プロジェクトマネジャーとサブリーダーは執筆担当章を持たず、他のメンバーが執筆した章の校正作業と最終報告書全体の整合性をとるためのレビューを担当した。

11月11日に志賀高原観光協会にて今回のプロジェクトをサポートしてくださった志賀高原観光協会、志賀高原リゾート開発、財団法人和合会に対してプレゼンテーションをおこなった。最終報告会の結果を反映させた最終報告書を取りまとめて志賀高原観光協会へ提出し、2013年の志賀高原プロジェクトは終了した。

4. プロジェクトを実施し得られたこと

4-1 国際学部

本プロジェクトの実施に際して、参加学生の

成長について社会人基礎力の観点から評価をおこなった。評価方法は、参加学生が質問票に基づいて社会人基礎力の各要素について自分の成長度合いを事前・中間・最終の3つの段階で評価する方法をとった。アンケートでは、社会人基礎力の各項目についてアンケート実施時点における自分のレベルを5段階で評価させた。5が最高、1が最低である。使用したアンケート票を添付資料1に示す。

国際学部那須一貴ゼミナールの参加学生12名に対して実施したアンケート結果を単純平均で評価した。集計結果を表1と図1に示す。

アンケート結果によれば、社会人基礎力の各項目とも段階を追って成長していることが明らかとなった。全体を通じて主体性と傾聴力が高く成長していることがアンケート結果から見て取れる。メンバーと共通の目標に向かって努力していく過程は、社会人として企業で働く際に経験することの模擬体験である。プロジェクトでは自分が働きかけなければ仕事が進まず、他の参加学生に迷惑をかけることにもなる。また常に誰かが指示してくれるのを待つだけではなく、自分から発信し創造していかなければチーム内でも浮いた存在になってしまう可能性がある。このようなことから、参加学生は常に自ら行動することを強いられることになりプロジェクト期間を通じて主体性が発達したのではないかと考えることができる。

傾聴力については、参加学生が自己評価しているレベルがもともと高かったこともあるが、相手の言うことに耳を傾けて理解することに加えて、相手の考えを積極的に引き出すというプロセスを経験したことが成長の要因だったのではないだろうか。プロジェクトを進めるためには参加者の意見・アイデアを引き出す努力も必要である。そのためには、相手の話をじっくりと聞き、相手が積極的に話をする環境を作らなければならない。その結果、相手は安心して自分の考えやアイデアを述べることができ、結果的にチームワークも高まっていくことになる。

表 1 参加学生のアンケート結果 (平均値)

出所：筆者作成

	前に踏み出す力			考え抜く力			チームで働く力						論理的思考力
	主体性	働きかけ	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレス耐性	
事前	2.83	2.17	2.50	2.33	2.50	2.50	2.33	3.25	2.58	2.92	3.42	2.67	2.33
中間	3.08	3.17	3.42	2.67	2.75	3.25	3.08	3.58	3.00	2.75	3.08	3.25	3.08
事後	3.92	3.25	3.58	3.42	3.25	3.33	3.25	4.25	3.75	3.42	3.67	3.58	3.58

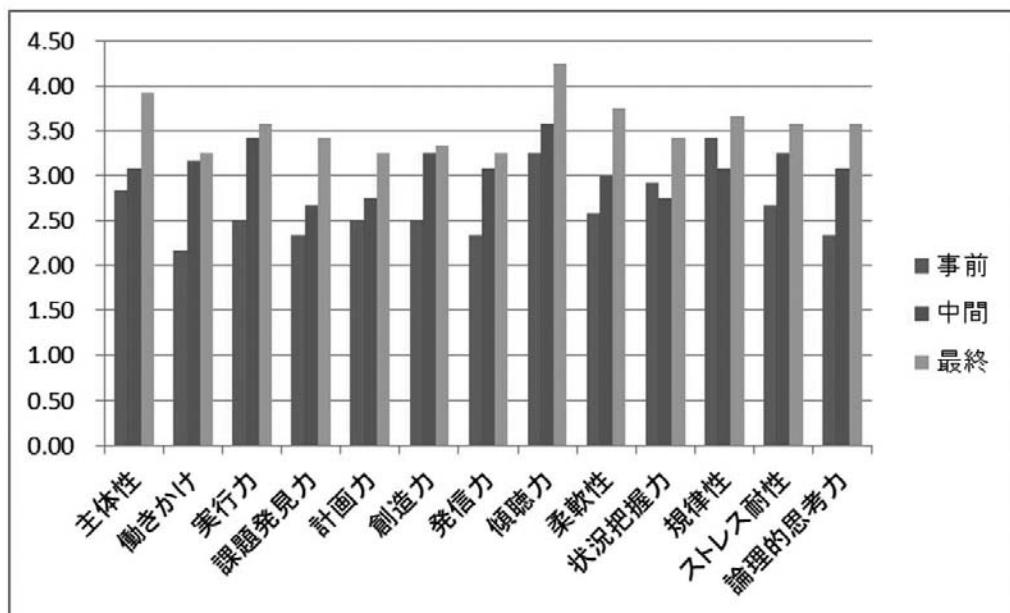


図 1 参加学生のアンケート結果 (平均値)

出所：筆者作成

また相手の意見を聞き、それを取り入れながら活動していくことで柔軟性も高まっていったのではないだろうか。主体的に動くと同時に状況に応じて自分自身の考えや行動を変化させることもプロジェクトを実施する上では重要である。

次に事前・期中・最終の各段階におけるアンケート結果を比較した際に特徴的な事項について述べる。

事前アンケート結果と最終アンケート結果の各質問項目の評価結果を比較すると、「働きか

け力 (1.08)」、「実行力 (1.08)」、「課題発見力 (1.09)」、「傾聴力 (1.00)」、「柔軟性 (1.17)」、「規律性 (1.25)」、「論理的思考力 (1.25)」の各項目の伸びが顕著である (括弧の数字は事前アンケートと最終アンケートの平均スコアの差)。また、各項目の成長時期を見ると、「働きかけ力」、「実行力」、「創造力」、「発信力」の4項目は事前～期中の間で成長し、「主体性」、「課題発見力」、「計画力」、「傾聴力」、「柔軟性」、「状況把握力」、「規律性」は期中～最終の間で成長する傾向があることがわかる。

事前～期中の段階はプロジェクトの準備段階である。この段階ではグループワークと議論を重ね、プロジェクト実施に向けた様々なアイデアを出し、それを形にしていく作業に従事していた。グループワークや議論では、自分の考えを他人に伝えること（発信力）、他人に対して働きかけて共同作業を行うこと（働きかけ力、実行力）、新たなアイデアを考えてそれを形にすること（創造力、実行力）が求められる。グループワークや議論を繰り返すことにより、これらの能力が育成されていったのではないかと考えられる。

また期中～最終の段階は志賀高原におけるカフェの運営期間である。カフェの運営期間中は、自ら積極的に行動し（主体性）、日々のオペレーションを通じて問題点を見出し（課題発見力）、それを解決して翌日のオペレーションに反映させるという活動を繰り返し行っていた。また毎晩のミーティングにおいて、ホール担当学生とキッチン担当学生の各々が議論を繰り返し、両者間の連携を模索するというプロセスを通じて相手の意見を良く聞くこと（傾聴力）、準備段階の計画に拘らず状況に応じて自分たちの行動を変化させること（状況把握力、柔軟性）、チームで役割分担を行い時間とルールを守って活動すること（規律性）が身につけていったのではないかと考えることができる。

特徴的な点として、状況把握力と規律性が期中アンケートでは低下することである。この理由は、準備期間中の学生がアルバイトや定期試験などを理由にミーティングに遅刻したり欠席したりしたことについて、低い評価を付けたためであろう。

論理的思考力については、プロジェクト期間を通じて順調に伸びている。事前準備からカフェの運営を経て最終報告書の作成に至るまで常に「何故」を意識して考え、他人に対して自分の考え方を説明し納得してもらうというプロセスを通じて強化されたものと考えられる。

またアンケートの自由記述欄を見ると、最終

アンケートの段階では事前・期中アンケートよりも参加学生がより厳しいレベルで自分の能力を評価していることが伺えた。これはプロジェクトが進むにつれて自分自身が求める社会人基礎力のレベル自体が向上していると考えられる。参加学生はこのプロジェクトから得た学びによって、プロジェクト参加前よりも社会で求められる社会人基礎力の各項目についてより具体的に認識することができ、アンケートへの回答段階でそれと自己の現状を比較したときにもっと高いレベルを目指す必要があると考えたのではないだろうか。

以上の結果より、本プロジェクトの実施により参加学生は社会人基礎力の各要素において高い成長を実現することができたと考えられる。またこのアンケート結果を今後のプロジェクトベースドラーニングにおける学生指導にも役立てていきたい。

4-2 健康栄養学部

国際学部と同様に健康栄養学部の参加学生8名の成長について社会人基礎力の観点から評価をおこなった。その結果を表2と図2に示す。社会人基礎力の各項目とも段階を追って成長していることが明らかとなった。特に「主体性」、「発信力」の伸びが著しかった。比較的小となしくコツコツと地道に作業を行うことを好む健康栄養学部の学生が、国際学部と共同でプロジェクトを成功させるためには、主体性を持って自分の考えを発信していく必要性を強く感じた結果と思われる。社会人の基礎力を養うためには極めて有用な学部横断型プロジェクトであった。

「論理的思考力」の伸びも顕著であった。自分の考えを他人に伝えるためにはまずは自分の考えが論理的であるのか、他人に分かってもらえるのかを考える必要がある。調理技術を伝えるにも基礎的な用語を理解してもらうために論理的な説明が必要である。他者を理解しその人にあった用語を使いながら、自分の考えを伝え

表 2 参加学生のアンケート結果 (平均値)

出所：筆者作成

	前に踏み出す力			考え抜く力			チームで働く力						理論的思考力
	主体性	働きかけ	実行力	課題発見力	計画力	創造性	発信力	傾聴性	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレス耐性	
事前	2.25	2.50	2.88	2.75	2.88	3.25	2.00	3.38	2.88	2.50	3.00	2.75	2.13
中間	2.50	2.75	3.13	2.88	3.38	3.38	2.13	3.50	3.00	2.63	3.25	3.25	2.25
事後	3.38	3.50	3.75	3.50	3.75	3.75	3.25	3.88	3.63	3.13	3.75	3.50	3.13

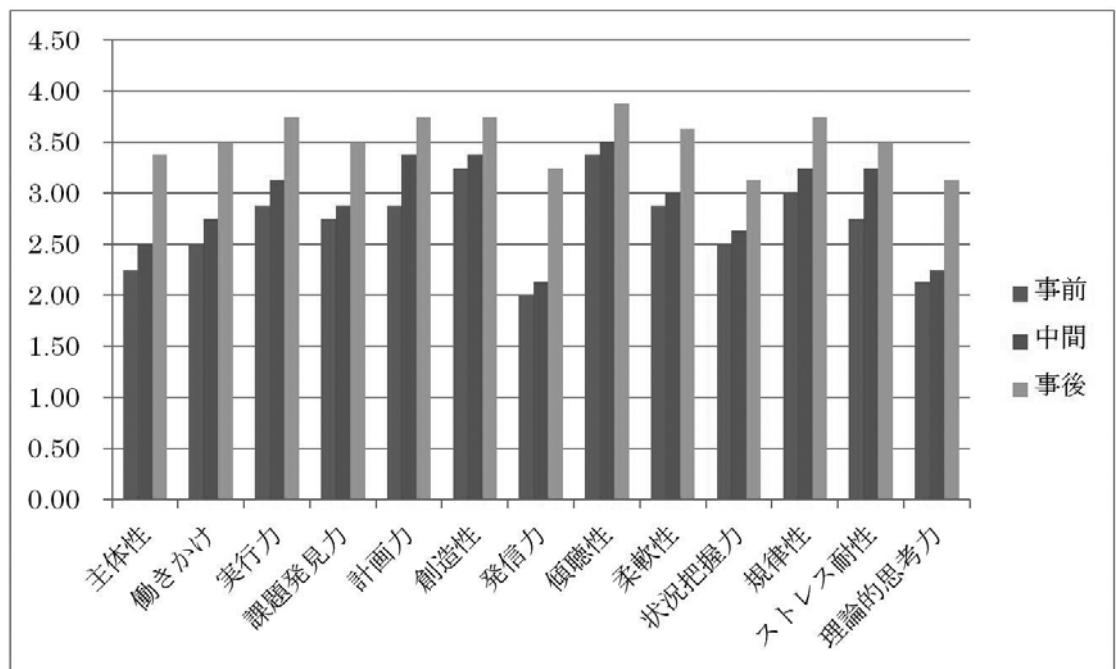


図 2 参加学生のアンケート結果 (平均値)

出所：筆者作成

る。社会人にとって重要なことを経験できたと思われる。

社会人基礎力の伸びは各項目ともに中間から事後で大きく伸びていた。中間期まではスイーツを開発・試作していた。学部内だけでの作業がほとんどであった。中間期以降は志賀高原でのカフェ運営期間であり、国際学部生と本格的に共同作業を行った期間である。専門領域の異なる学部横断でプロジェクトを行った効果がみ

てとれる。

4-3 学部間の比較

学部間の比較のため、健康栄養学部の値から国際学部の値を引いた値を表3に示した。()内の数値はマイナスの値であり、国際学部に比べて健康栄養学部で低かったことを示す。「主体性」は各期を通じて国際学部に比べ健康栄養学部で低かった。国際学部では昨年度に1つ上

表3 健康栄養学部と国際学部の差（健康栄養—国際学部）

出所：筆者作成

	前に踏み出す力			考え抜く力			チームで働く力						
	主体性	働きかけ	実行力	課題発見力	計画力	創造力	発信力	傾聴力	柔軟性	状況把握力	規律性	ストレス耐性	理論的思考力
事前	(0.58)	0.33	0.38	0.42	0.38	0.75	(0.33)	0.13	0.30	(0.42)	(0.42)	0.08	(0.20)
中間	(0.58)	(0.42)	(0.29)	0.21	0.63	0.13	(0.95)	(0.08)	0.00	(0.12)	0.17	0.00	(0.83)
最終	(0.54)	0.25	0.17	0.08	0.50	0.42	0.00	(0.37)	(0.12)	(0.29)	0.08	(0.08)	(0.45)

の学年すなわち先輩が志賀高原でカフェ運営を行っている。先輩から様々な情報を得てカフェ運営のイメージを頭に描いた後にこの学部横断プロジェクトを開始した。一方の健康栄養学部の参加学生は国際学部のカフェ運営に必要なスイーツを開発するという依頼を受けたとの気持ちが強く、主体性の低さに繋がったものと思われる。

事前アンケートにおける「状況把握力」も国際学部比べて健康栄養学部では低く、上記と同様の理由であろう。しかし、「状況把握力」はプロジェクトの進行により改善した。

「計画力」が高いのは健康栄養学部の特徴である調理関連科目との関連性が考えられる。自ら献立を作り数名の仲間とともに調理するような科目が多く配置され、日々計画力を求められている結果であろう。

5. 学部横断型プロジェクトベースドラニング実施に関する課題

今回の学部横断型プロジェクトベースドラニングでは、参加学生の成長という点では高い成果が確認できた。国際学部と健康栄養学部の協力によるプロジェクトの企画・運営は文教大学湘南キャンパスの特徴を活かしたものとして、外部に対しても高い広告宣伝効果があるものとする。また学部横断型プロジェクトとすることで、参加学生は他学部学生との交流を通じて新たな学問領域に関する興味を持ったよう

である。これは学生のみならず、指導する側の教員にとっても同じことが言える。キャンパスに存在する様々な学部の教員が情報交換をする機会としても有意義な活動であった。

一方で学部横断型プロジェクトベースドラニングを実施する際の課題としては、スケジュール管理と学部が異なる参加学生同士の協働のための場づくりが難しいことがあげられる。

国際学部と健康栄養学部では、参加学生が受講している講義やゼミナールの時間帯とコマ数が異なっている。そのため、参加学生がプロジェクトに費やすことができる時間も異なってくる。その結果、両学部で実施しているタスクの進捗度合が異なってしまい、プロジェクト全体の進捗管理が困難であった。具体的には、健康栄養学部で担当したカフェで提供するメニュー立案と国際学部が担当したカフェ運営期間中の利益計画の立案のように、両学部にまたがるタスクが同じタイミングで完成しなければ次のステップに進めないケースがあげられる。これは本プロジェクトの外部要因による制約が原因であるため、参加学生同士の調整だけでは解決できない問題である。

また講義やゼミナールの時間帯が異なるため、協働作業を実施するための時間と場所を確保することが難しいという問題を解決するためには、プロジェクトオフィスとなる部屋を用意する方法が考えられる。プロジェクト期間中は

参加学生がいつでも利用できる部屋を用意することができれば、講義の空き時間などにその部屋で作業を行うことができる。これにより参加学生同士が顔を合わせる機会も増えるため、情報の共有化や緊密なコミュニケーションができるようになる。その結果、スケジュール管理などプロジェクト業務が行いやすくなるばかりではなく、自発的な議論が活発に行われ、参加学生に対する教育効果もさらに高まるのではないだろうか。

6. おわりに

これまで述べてきたとおり、学部横断型プロジェクトベースドラニングには高い教育効果

があることがわかった。このような貴重な学びの機会は今後ともぜひ継続していきたいと考えている。また学部横断型プロジェクトベースドラニングの実施を通じて、教員同士の良いコミュニケーションの場も作られたのではないかと思っている。このようなプロジェクトを通じた教員同士の情報共有化や共同作業は、将来の共同研究のきっかけになるなどの間接的な効果も期待できるのではないだろうか。

【参考文献】

経済産業省 (2011) 「社会人基礎力育成の手引き—日本の将来を託す若者を育てるために教育の実践現場から」、学校法人河合塾

【添付資料】 アンケートシート

アンケートシート		…学生本人記入欄		…教員記入欄	
氏名		学籍番号		担当業務 (グループ名)	
プロジェクトに参加した中間レビュー	プロジェクトを通じて達成したい自分自身の目標				
	これまでのプロジェクトでの振り返り	(今まで学んできたことや身についた能力・知識、また反省点や課題について)			
	プロジェクトを通して向上したと思う社会人基礎力の能力				
	プロジェクトを通じて身に付いたと思う専門知識、スキル				
	プロジェクトを通して現段階までで得られた成果				
	教員への連絡・相談	(特になければ空欄でも構いません)			
自己分析	社会人基礎力の分類	能力要素	現在のレベル	評価の根拠 (いつ、どんな状況(場面)で、どのように努力または工夫をすることにより発揮(しよう)したと思うか、もっと努力や工夫が必要と感じたか)	
	前に踏み出す力 (アクション)	主体性	1 2 3 4 5		
		働きかけ力	1 2 3 4 5		
		実行力	1 2 3 4 5		
	考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	1 2 3 4 5		
		計画力	1 2 3 4 5		
		創造力	1 2 3 4 5		
	チームで働く力 (チームワーク)	発信力	1 2 3 4 5		
		傾聴力	1 2 3 4 5		
		柔軟性	1 2 3 4 5		
		状況把握力	1 2 3 4 5		
		規律性	1 2 3 4 5		
		ストレスコントロール力	1 2 3 4 5		
	論理的思考力	論理的思考力	1 2 3 4 5		
教員からの講評、アドバイス					